

アスペクトの一考察

— 非対格性動詞について —

塚 原 南欧子

1. アスペクトの概念

ことばの表出過程には事象と発話者の焦点とが相対的に関わってくると考えられる。これらの問題を考える時、国広(1996)において示された一般アスペクト体系の概念を援用するのは有益である。ここには、視点がよりはっきりと示されており、点と事象とが関わるアスペクトのタイプを、ほぼカバーできると考えられるからである。

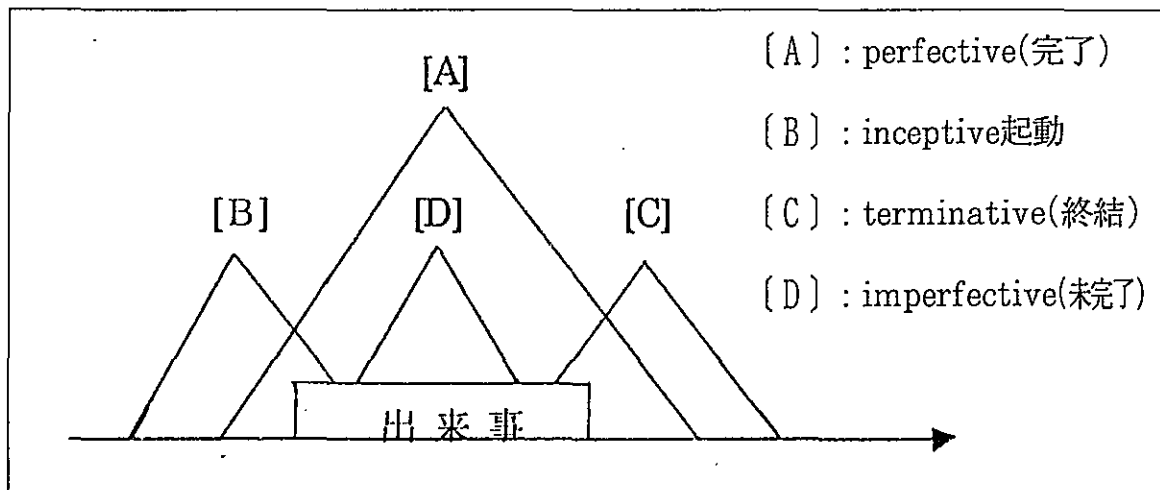


図1 一般アスペクト体系 国広(1996)による

国広(1995:14)によれば、それぞれ三角形の頂点には視野がおかれ、三角形はその目が捉えている視野を示すという。[A]は、場面をひとつものとしてとらえる方法であり、対象の内部局相について注意を払わない。4つの三角形は、それぞれ、[A] : perfective 完了、[B] : inceptive 起動、[C] : terminative 終結、[D] : imperfective 未完了を表す。

一般に文法的アスペクトといった場合には、英語では進行形であったり、have+過去分詞の形であらわされる表面に見えるものなどが例にあげられ、説明されることが多く、日本語では、「ル形」と「テイル形」の違いということで説明されることが多いが、本稿では、語義的なものも文法的なものも含めてアスペクトと考え、語義的アスペクト、特に状態性についての考察を行いたいと思う¹⁾。両者を区別する必要がある時は、それぞれ、語義的アスペクト、文法的アスペクト、と呼ぶことにする。

2. 語義的アスペクト

語義的アスペクトの考察において、動詞の事象の性質という観点から、Vendler(1967)は動詞を、活動(Activities)、到達(Accomplishments)、達成(Achievements)、状態(States)の四つに分類している。しかし、例えば

(1) I sat here.

のような文では、downがない限り活動動詞としても、状態動詞としてもみる事ができる。Vendler(1967)自身も、smoke という動詞を例にあげ、ある一つの動詞が2つの分類に属す²⁾ 可能性があることと述べているように、二義には注意が必要である。

影山(1996:84)は、次のように概念構造のスキーマを提示している。

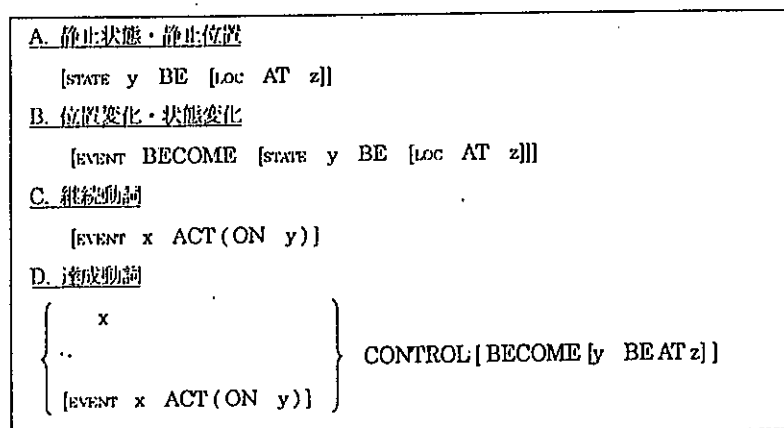


図3 影山(1996)の動詞の概念構造

x は動作主としての主語、y は行為または動作をうける客体をあらわす。影山(1996:84)によれば、図2の意味タイプは、だいたいVendler(1967)分類の、状態動詞にAが、到達動詞にBが、活動動詞にCが、達成動詞にDが該当するという。

このスキーマを参考にし、(1)におけるsitの二義をとらえ直すと、次のようなことが言えるだろう。すなわち、sitのアスペクトを状態としてとらえ、「座っている」とみた場合、sitはAタイプの構造をもつ動詞だと言うことができるが、「座る」という意味にすると、彼女は彼女自身の状態をコントロール(CONTROL)すると認識できるので

(2) *sit* : she CONTROL [BECOME [herself BE AT-there]]

というDタイプの動詞と言えることになる。もし仮に、「sit はBE構造をとるが、オプションでBEの外に起動相をとる」と考えれば、(1)でみられた二義が説明でき、さらに、状態をあらわす動詞であるにもかかわらずshe was sitting on the chairのように、動作結果の持続の意味でingを使うことができるという説明も可能になる。事象sitの構造中のy(herself) BEに焦点があてられていれば「座っていた」となり、x(she) CONTROLに焦点があてられていれば、「座った」となるのである。

焦点ということについて、最初に概観した図1 国広(1996)による一般アスペクト体系を適用すると次のような説明が可能である。対象の状態、y(herself) BEに焦点があてられているということは、この場合、事象の内部をみて、状態を眺めている見方であるといえるので、この事象は未完了[D]であり、「座っていた」となる。一方、x(she) CONTROLに焦点があてられていれば、起動時が焦点に入り、なおかつその後の状態まで視野に入っているので、[C]起動の「座った」という解釈になる。もしこのときに、downやupをつければ、CONTROLがよりはっきりと認識されることになるため、このような副詞があるときには、二義は発生しない。

状態をあらわす動詞として分類されているknowについてもみてみよう。

(11) *I am knowing.

これが非文であることの理由は、状態を表す動詞には進行のingはつけられない、ということであるが、同じ状態動詞として分類されるsitと違う点は何であろうか。

know は、日本語の「知る」と違い、語義的アスペクトがそのまま状態を示すため、概念構造であらわすと、sit のように状態を示す[y BE]構造をとる。しかし、その外に起動相はとることができないという点がsitと違っていると考えられるだろう。「知っている」という状態をあらわす動詞のもつ意味が、know に、行為者の CONTROL が及ばないという制約をかけるためである。know がingをとれないのは、ここに原因があると思われる。CONTROL ができないものを持続させることはできないのである。

このことは、次のように know は命令文として言うことができないということからもわかる。

(4) *Know it.

しかしながら、sit は、今までみてきたようにCONTROLすることができるので Sit down! のように命令文でいうことが可能である。日本語の「知る」は起動相をもつ状態変化であり、CONTROLを取るため、英語の know と違い、「恥を知れ」のようにいうことができる。このように見ても、英語 know の語義的アスペクトの違いは日本語「知る」と違い、CONTROLが取れないことがわかる。

日本語の場合に興味深いのは、否定の意味をあらわしたい時これを単純に否定形にして

(5) *知っていない。

とはできないことである。このような場合、普通「知らない」という。そ

もそも、「知らない」という状態は、CONTROLが直接及ばない状態 BE ということである。対して「知っている」は、無の状態 BE から「知る」状態 BECOME が起き、それを頭の中で持続 CONTROL していることであるから、テイル形を使って状態をいうことができる。「知らない」は、BECOME がないため、それを CONTROL することもない。であるから、その結果の CONTROL 下をあらわすテイルを使うことはできない。

実際、(4)の誤用は、言語習得過程にある幼児や、日本語学習者がよく間違える例である。誤用の原因は、様々考えられるが、第二言語学習過程での誤用ということであれば、母語の語義的アスペクトの違いによる母語干渉として考えられるかもしれない。しかし、幼児が間違えた場合は、「知る」そのものの語彙のアスペクトがまだ習得されていないものとも考えられる。

意味の特徴や性質は統語にも、また文の意味解釈にも関係してくる問題である。これらの動詞の意味には何か特徴があるのだろうか。

3. 動詞の項構造

3.1. 非対格性の仮説 - Unaccusative Hypothesis

動詞の意味構造と統語との関わりにおいて、Perlmutter(1978)らにより提唱された非対格性についての議論がある。この考え方で重要な役割を果たしているのが、自動詞を2つにわけてとらえる考え方であるが、状態性が関わってくる問題であるため、2でみたことがここでどう関わるのかについてみたい。ここでは、この非対格性の理論と実際の運用とのかかわりをみる。

Perlmutter(1978)らによれば、自動詞は非対格自動詞、非能格自動詞の2つの区別がみとめられるという。(下の引用文においては、非対格自動詞はb, 非能格自動詞はc。) Perlmutter(1978:160)によれば、他動詞構造、非対格構造、非能格構造は、次のように規定し³⁾、層を用いて説明を行っている。

- a. A *transitive* stratum contains a 1-arc and a 2-arc.
- b. An *unaccusative* stratum contains a 2-arc but no 1-arc.
- c. An *unergative* stratum contains a 1-arc but no 2-arc.

ここで規定されていることを簡単に項構造⁴⁾で見るとわかりやすい。例えば、a 他動詞の例として、() のような文を考えると、

(6) Gorillas drink beer. → *drink* : (Gorillas < beer>)

Gorillasはこの文の動作主(x)であり、beerはdrinkの対象(y)であるから、(14)は、このようにあらわされる。() 内のbeerが入っている< >の要素は内項と呼ばれ、文構造では目的語の位置にあらわれる。Gorillasが入っているところの要素は外項と呼ばれ、文構造では主語の位置にあらわれる。(14)と同じようにそれぞれ、b 非対格自動詞、c 非能格自動詞の例をみると、次のようになる。

(7) Gorillas exist. (Perlmutter, 1978:160) → exist : (<Gorillas>)

(8) Gorillas play at night. (Perlmutter, 1978:161) → play : (Gorillas < >)

(7)ではGorillasはexistを左右しない対象(y)である。動作主 (x) がいないため、外項は空いた状態になっている。文になるときには、主語の位置にyがあらわれるが、yはexistを直接コントロールする動作主ではない。このような自動詞は非対格自動詞と呼ばれる。一方(8)では、Gorillasは動作主(x)となりplayを直接左右する。対象(y)はとらないので内項は空いている。このように動作主自らが行うが、対象(y)がない自動詞を非能格自動詞と呼ぶ。影山(1996:90)によれば、統語構造においてbで示される非対格構造(unaccusative stratum)は図4のA状態・B状態変化に対応し、cで示される非能格構造(unergative stratum)はCに対応し、2つのタイプが合体したのがDにみられるという。また、意味的特徴もそれぞれ合致していることが指摘されている。影山(1996)が紹介しているPerlmutter & Postal(1984)による英語の例をあげる。

非能格自動詞

- (1) 意図のないし意志的な行為 : work, play, speak, smile, skate, swim, dance, jump, walk, fight, agree, cry, whisper, shout, bark, roar
- (2) 生理的現象 : cough, sneeze, hiccough, belch, vomit, sleep

非対格自動詞

- (1) 形容詞ないしそれに相当する状態動詞
- (2) 対象物を主語に取る動詞 : burn, fall, drop, sink, float, slip, glide, tremble, boil, darken, freeze, melt, evaporate, open, close, break, explode
- (3) 存在ないし出現を表す動詞 : appear, happen, exist, occur, disappear, last, remain, survive
- (4) 五感に作用する非意図的な現象 : shine, sparkle, glitter, smell, stink, jingle, click
- (5) アスペクト動詞 : begin, start, stop, cease, continue, end

影山(1996)は、この区別が日本語にもだいたい同じように対応すると述べ、日本語にも非対格、非能格の別があることを論証している。非対格と非能格の区別にCONTROLがどう関係するかということについては、様々な議論があるが、大まかに言えば、非能格は意図的CONTROLの可能性をもち、非対格は対象物(y)自体が状態・状態変化に関わるもので、他にCONTROLするものが存在しない、という違いがみられるようである。

しかし、判断に迷うケースがある⁵⁾。意味的にもまた構造的にも非対格自動詞に分類されるはずであるbeについて考えてみる。影山(1996:154)は、「非対格動詞は命令文には全く成り得ない」としているが⁶⁾、

- (9) Be a good student.

の例を考えると、この文は、意味的にも、文構造からも命令文であると考え

られる。とすると、beは、純粹な非対格動詞とは言い切れなくなる。また、

(10) I'll be there.

の例を考えた場合、(10)における動作主は自身の存在をコントロールできると考えなければ、このような文の解釈は難しい。このようにみると、意味的に動詞が状態のアスペクトを含んでいる場合の文において、状態を変化BECOMEさせ、CONTROLする力があるyが対象となり得る場合、非能格にもなり得るといった方が良いのかもしれない。

3.2. 日本語の非対格動詞とCONTROL

日本語の状態動詞の「いる」についても英語と同様にBEの外にCONTROLをオプションでとると考えた方が良いかもしれない。項構造で考えれば、「いる」は確かに、「教室に先生がいる」のように

(11) いる : [<先生>]

という非対格動詞として考えられるが、「今日、8時まで会社にいる」というとき、動作主は、「いる」をCONTROLできることを示唆している。これは、

(12) 8時まで会社にいる。

のように命令文で言えることから確かめられる。しかし、テイル形を使って「いている」とは言うことができない。「ある」も同様に「あっている」とは言えない。このように考えると、日本語の「ある」「いる」は、BECOMEをとることができないと考えられる。

他に、状態変化や可能の意味をあらわすといわれる動詞に見える・聞こえるなどがある。「見える」「聞こえる」は可能をあらわすとも状態をあらわす⁷⁾とも言われているが、これらは、自他の区別からいえば自動詞であり、

「テレビの音がはっきり聞こえる」、「今日は富士山がはっきり見える」などの例を考えれば、非対格動詞であると考えられる。このことから「聞こえる」「見える」は、状態をあらわしていると考えられるが、このことを言語化する前提には、以前はそうではなかったということがあるので発話時にBECOMEが認められると考えられる。テイル形を使って、「聞こえている」「見えている」などのように使うことはできるが、命令文にすることはできない。人間は、対象が「見える」「聞こえる」という、状態を知覚するだけの存在であるから、対象に直接働きかけることはできない。間接的に、テレビのボリュームをあげたり、汚れている窓を拭いたり眼鏡をかけたりして知覚の精度をあげることはできるが、しかし、人間は直接映像や音をCONTROLできない。

このように考えると、「いる」は非能格と非対格の両性をもちあわせ、「わかる」は能格性をもち、「見える・聞こえる」は非対格性をもつと考えることができる。

4. 現在形

4.1. 「今」ではない現在形

現在形⁹⁾を基本にして考察を行ってきたが、この現在形が示すアスペクトは、テンスとはどのように関わるのであろうか。Comrie(1976:66)は、次のように述べている。

Since the present tense is essentially used to describe, rather than to narrate, it is essentially imperfective, either continuous or habitual, and not perfective.

しかし、実際は完結したように思われる事象に現在形が用いられることもある。

- (13) (Batter) pops it up/way up in the air in the infield. (Ishiguro, 1984:28)

バッター打ち上げました。

日本語では、通常タ形であらわされ、実現したことをあらわす形で表現される。Leech(1971:7)は、スポーツの実況放送や、手品・料理の実演者の解説などに使われている現在形の例をあげ、次のように説明している。

In most of these cases, the event probably does not take place "exactly" at the instant when it is mentioned: it is subjective rather than objective simultaneity that is conveyed.

しかし、このような主観という説明だけで、これ以外の現在形の用法の説明もできるだろうか。Leech(1971:12)は、新聞の見出しなどにも過去時制や完了時制よりも現在形が用いられることが多いことを次のような例をあげて指摘しているが、

- (14) Ex-champ dies. (Leech 1971:12)

前チャンピオン、死去。

その理由は because of its brevity and dramatic vividnessにあるとし、見出しの現在を、The 'headlinese' use of the Present Tense has something of the dramatic quality of the 'instantaneous present' と述べているが、簡潔さと劇的な臨場感のためだけであるならスポーツ実況も同様の説明ですむはずである。

時と無関係に使われている現在形は、すでに指摘がなされている⁹⁾ とおり、他に料理本などにもみうけられる。次の例は、you が省略されていると考えれば良いだろう。

- (15) Mix ingredients in order given and beat thoroughly. Make balls.

上記の品々を全部よく混ぜてコロッケの型に造りパン粉を付けます。

(AMERICAN RECIPES in ENGLISH and JAPANESE. 1939. The DAUGHTERS OF AMERICA)

日本語でもこのようなとき、同様に現在形、ル形を使う。三上(1960)は、料理などで用いられるこのような現在形を観察し、それらの文のタイプを対格が問題になる文と特徴づけている。そこでは、このような「だれが何をするのか」の「だれが」が全然問題にならず、もっぱら「何を」が中心になる文を「対格型」¹⁰⁾と呼び「操作型」「料理型」と文を特徴づけている。ここでの対格とは、「何を」にあたる対象をさしていると思われる。非対格性の仮説をみた3において、項構造のyであらわしたものであると考えていいだろう。

4.2. 非対格型の認知場面

もし、非対格型の認知場面があると考えたらどうなるだろうか。つまり、文中から発話者の存在を消す必要があるとき、または、客体が非常にクローズアップされているような状態をいう場合である。文中で用いられている現在形が発話時の現在と結びつかない例として、ここまで英語においてはスポーツの実況、新聞の見出し、料理のレシピを見たが、この他にも歴史的現在や記録の現在¹¹⁾などが認められている。3において自動詞の格と、CONTROLが関われるか否かということを見たが、ここで見たような現在形は、すべて発話者のCONTROLが及ばない場面であると考えられるだろう。また、動作主は確かに存在しているのだが、発話者からみると動作主は対象であり、動作をCONTROLしているとは映らない。動詞の非対格性の仮説において問題となったのは、個々の動詞がどのようにふるまうか、という統語にも関わる問題であったが、ここでは、事象とそれに対する発話者の心的態度の関わりが問題となる。

図1でみた国広(1996)のアスペクト体系の図を思い出してみる。4でみた

ような現在形の文は、この三角のどこにも属せないと考えられないだろうか。出来事の局相がない状態という場面を図であらわすとすれば、点とするか、または、どこまでも延びる線としてしかあらわすことができないだろう。これらには、アスペクトの「場面の内的な時間構成¹²⁾」がなく、これらの時、視点は対象の中に存在しており、発話文には反映されないと考えられる。このように考える、視点が対象の中にあるとき、これらの文においてアスペクトはゼロであるということになる。図の3において、出来事は始めと終わりがあるが、そのどちらも認識されず、その出来事の内的時間構成がないというような場合、アスペクトは完了も未完了も起動も終結も示さない。現在形は、このようなアスペクト的に空の状態を示すのに有効であると思われる。

発話者の存在を文中に意識させないという方法に現在形を使うことがあると仮に考えると、英語と日本語にその用いられ方に共通する用法があったとしても不思議ではない。料理本にその例が見られることは、先に見たが、同様に新聞の見出しにも現在形・ル形が見られる。

(16) 土井氏の続投固まる（読売新聞、1997年12月29日 朝刊）

日本の新聞の場合は「ハワイ行きジャンボ機、300メートル落下」のように文末の動詞を名詞化するか、連語の結束性に頼って「新党結成へ」などと助詞をつけ、最後まで言わずに内容を表現することが多いが、このような方法がとれない場合、ル形を用いることがある。(16)の場合、記事の中身を読むと「土井氏の無投票再選が事実上固まった」とあり、すでに決定したことを述べているが、

(17) 白骨化、身元確認急ぐ（読売新聞、1997年12月29日 朝刊）

という場合は、続く記事の文中に「司法解剖などを行い、身元確認を急いでいる」とあり、現在の進行状況を現在形で伝えていることがわかる。状態動詞でない動詞を現在形で使うと「未来時の動作をあらわすか、現在時の習慣

的動作、或いは普遍的動作を指す』¹³⁾ (久野 1973:79) と言われることがあるが、(17)の例はこの説明になじまない。また、

(18) さっさと歩く！

のように、ル形で命令をあらわすこともある。国広(1967:63)はこのようなル形の用法を「間接的な命令」とし、「現在の計画」を示すことによって結果的に相手がそれに従ってくれることを期待する用法としているが、英語でも状態を示すことにより命令を伝えることもある。ただし、次の例では現在形ではない。

(19) Come on, Harold. We're walking.

こいよ、歩くんだ

(EARLY AUTUMN, Robert B. Parker 1981: 75 邦訳：菊池光)

このように、文中から発話者の存在が消えているような場面において、非対格型の認知が行われていると考えられないだろうか。

まとめ

以上、状態性という観点から、一つの語がもつ二義を用法や格関係からみて、二義が語彙それぞれの特性と焦点とのかかわりで発生することをみた。また、非対格性の観点から、対格に焦点をおいた認知場面を想定し、現在時をしめさない現在形の用法、及び過去形の特性と日本語のタ形の特性の差を用例から検証を試みた。多々不備な点があり、論じ残した問題は多く、語義的アスペクトも状態性以外のアスペクトがどうなるのか、それが文法的アスペクトと組み合わせたときにどうなるのか、という動詞群全体の考察が課題として残る。ここで深く関わってきたCONTROLや焦点などを問題としてとらえて考察を行っていくにつれ、文の背景にある人間の認知について意識しないわけにはいかなかった。言語を使う人間がいるからこそ、二義発生

するのだろう。これらの発生課程を探るのは、自らの思考手段を分析することにもなり、新たな発見につながる。これは、やはり、興味深いことであると感じた。

参考文献・注

- Comrie, Bernard. 1976: *Aspect*. Cambridge University Press.
 _____ . 1985: *Tense*. Cambridge University Press.
- Ishiguro Toshiaki. 1984. "Verb Uses in the Reporting and Briefing of Baseball Sportscasting." *Descriptive and Applied Linguistics*. Bulletin of the ICU Summer Institute in Linguistics. Vol. XVII International Christian University Tokyo Japan.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房
 _____ . 1996. 『動詞意味論 一言語と認知の接点』 くろしお出版
- 国広哲弥. 1967. 『構造的意味論 一日英両語対照研究』 三省堂
 _____ . 1982. 「テンス・アスペクト 日本語と英語」『講座日本語学11 外国語との対照』 明治書院
 _____ . 1985. 「認知と言語表現」『言語研究』第88号 日本言語学会
 _____ . 1987. 「アスペクト辞『テイルの機能』」『東京大学言語学論集 '87』 東京大学文学部言語学研究室
 _____ . 1994. 「認知的多義論」『言語研究』第106号 日本言語学会
 _____ . 1995. 「言語の認知的側面」『日本語学』14-10 明治書院
 _____ . 1996. 「一般アスペクト体系」神奈川大学大学院講義資料
- Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
 _____ . 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- 久野 章. 1973. 『日本文法研究』 大修館書店
 中右 実. 1980. 「テンス、アスペクトの比較」『日英比較講座 第2巻 文法』 大修館書

- _____. 1994. 『認知意味論の原理』 大修館書店
- Perlmutter, David. 1978. "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis," *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*.
- 寺村秀夫 1984. 『日本語のシンタクスと意味』 くろしお出版
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- 山田小枝 1984. 『アスペクト論』 三修社

-
- 1 国広(1995)には、副詞や名詞にもアスペクト的区別が認められることが指摘されている。例えば、「この建物の建築には約1年かかります。」の建築は未完了で、「この建築は違法ですから、取り壊します。」の建築は完了である。
 - 2 Vendler(1967:108) smokeの例。Are you smoking? の場合は、活動動詞、Do you smoking? の場合は状態に分類される。
 - 3 ここで使われる非対格、非能格という術語は、Perlmutter(1978)自身が命名したわけではないようである。Perlmutter(1978:186)はこのように述べている: The terms 'unaccusative' and 'unergative' are due to Geoffrey Pullum.
 - 4 項構造(argument structure)では、時間や場所、手段などは記述せず、もっぱら術語が取る名詞句のみを記述する。項構造の表し方は現在、様々な方法がなされているようであるが、本稿においては、影山(1993)が用いている動作主(Agent)、対象(Theme)という意味役割を示すスタイルを参考にする。
 - 5 分類に関し、非対格か他動詞か、迷う動詞もある。影山(1996:140)は他動詞と同形態で自動詞に交替するものを能格動詞とよび、非対格動詞と区別する必要があると述べている。例えば The door was opened by John. のopenは他動詞であるが、The door opened. いう文では、非対格自動詞としてみるができる。しかし、この分類においてもbeは非対格動詞として分類されている。
 - 6 影山(1996:154)によれば、能格動詞は対象自体が使役主の機能を合わせもっているもので、命令文が成り立つと述べているが、この場合、beは他動詞とは考えられないので、能格動詞ではないと思われる。
 - 7 久野璋(1973:79)によれば、[+状态的]動詞は、「解る、出来る、聞こえる、見える、要る、有る、在る」であるとしている。また、動詞が[+状态的]の動形詞は現在形で用いられるときは、現在時をあらわし、[-状态的]の動形詞は、未来時の動作を指すか、現在時の習慣的動作、或いは普遍的動作を指す、としている。
 - 8 便宜上、現在形というのは、動詞edなどの接辞がつかない状態の形をさす。すべて動詞が現在

を示しているということでない。

- 9 国広(1967:90)
- 10 ここでいう対格型というのは、対格を中心に考えるものの見方で、言語類型でいう対格型の言語、能格型の言語というものとは違うと思われる。
- 11 国広(1967:77)には口語の例がある。
- 12 Comrie(1976)
- 13 寺村(1984:95)にも同様の記述があるが、その他に説明の困る基本形の用法があると述べられている。